

ホーム > 各種データ・資料 > 地球環境・気候 > 大雨や猛暑日など（極端現象）の長期変化 > 大雨や猛暑日など（極端現象）のこれまでの変化

大雨や猛暑日など（極端現象）のこれまでの変化

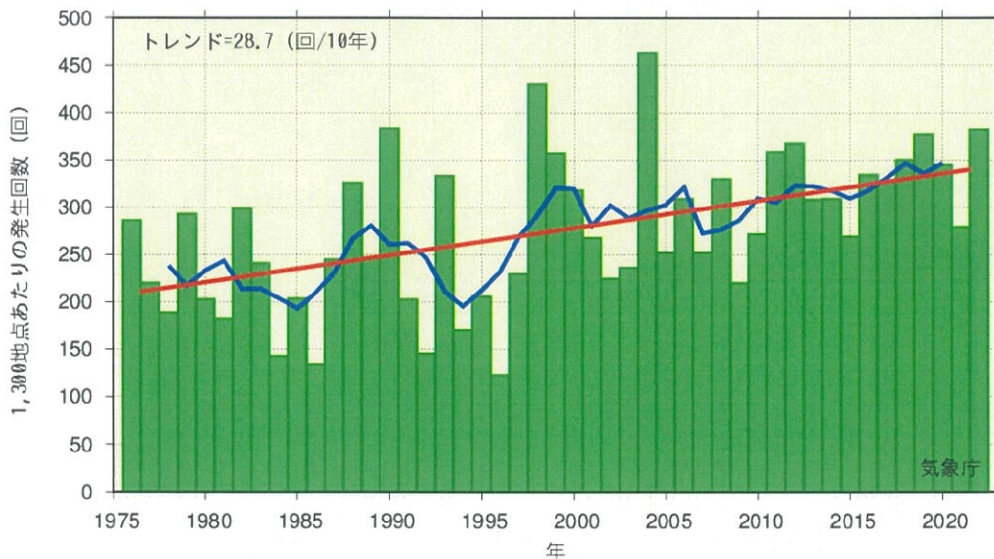
ここでは気象庁の観測データを基に、大雨や猛暑日など（極端現象）のこれまでの変化を示します。

要素： [全国アメダス] 1時間降水量50mm以上、80mm以上、100mm以上の年間発生回数 表示

全国（アメダス）の1時間降水量50mm以上、80mm以上、100mm以上の年間発生回数

- 大雨の年間発生回数は有意に増加しており、より強度の強い雨ほど増加率が大きくなっています。
- 1時間降水量80mm以上、3時間降水量150mm以上、日降水量300mm以上など強度の強い雨は、1980年頃と比較して、おおむね2倍程度に頻度が増加しています。

【全国アメダス】1時間降水量50mm以上の年間発生回数



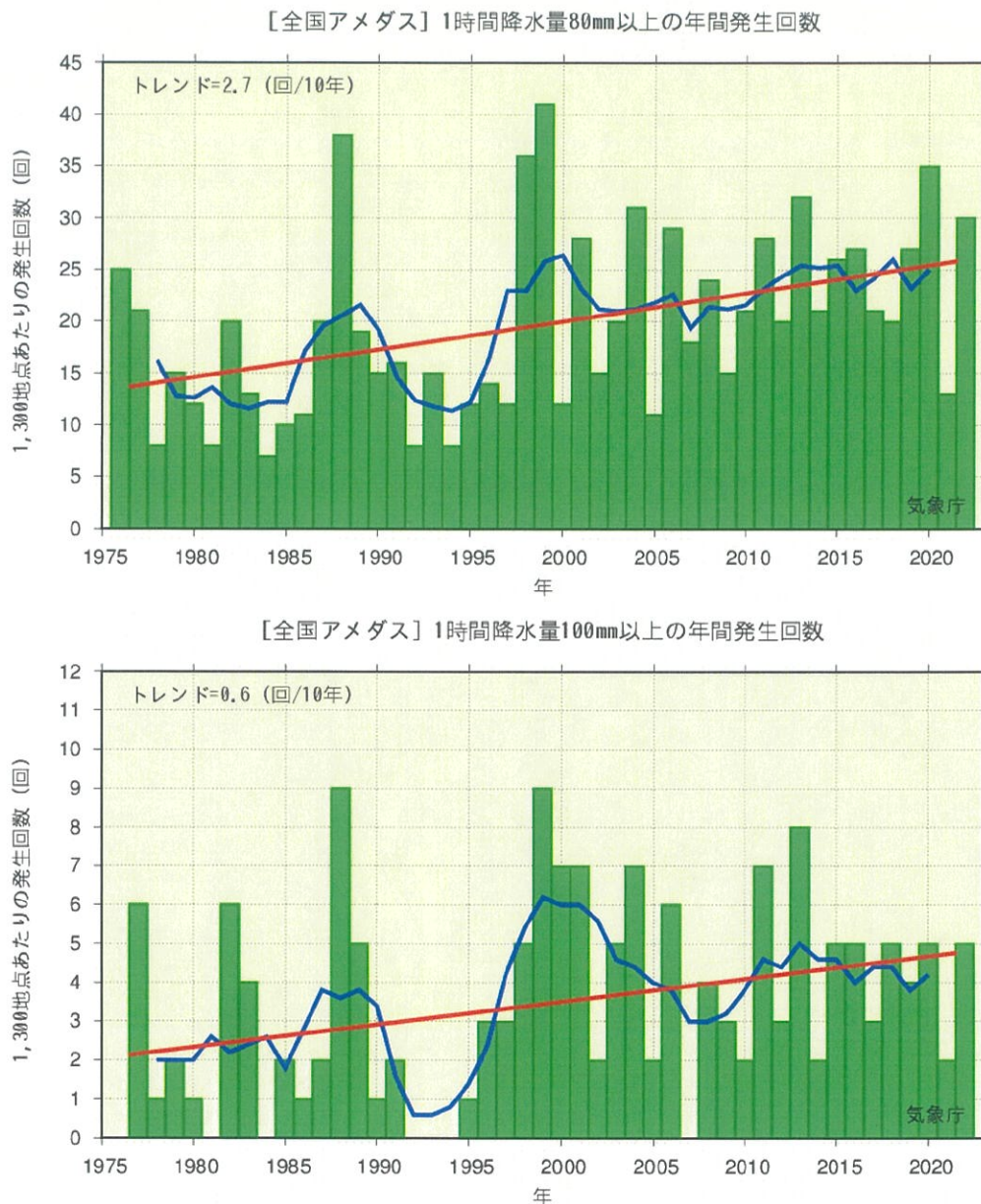


図 全国の1時間降水量50mm以上（上）、同80mm以上（中）、同100mm以上（下）の大雨の年間発生回数の経年変化（1976～2022年）

棒グラフ（緑）は各年の年間発生回数を示す（全国のアメダスによる観測値を1,300地点あたりに換算した値）。折れ線（青）は5年移動平均値、直線（赤）は長期変化傾向（この期間の平均的な変化傾向）を示す。

[数値ファイル \(csv形式\) \(1時間降水量50mm以上\)](#)

[数値ファイル \(csv形式\) \(1時間降水量80mm以上\)](#)

[数値ファイル \(csv形式\) \(1時間降水量100mm以上\)](#)

※文字コード:Shift_JIS、改行コード:CRLF

- 全国の1時間降水量（毎正時における前1時間降水量）50mm以上の大雨の年間発生回数は増加しています。
 - 統計期間1976～2022年で10年あたり28.7回の増加、信頼水準99%で統計的に有意。
 - 最近10年間（2013～2022年）の平均年間発生回数（約328回）は、統計期間の最初の10年間（1976～1985年）の平均年間発生回数（約226回）と比べて約1.5倍に増加しています。
- 全国の1時間降水量80mm以上の年間発生回数は増加しています。
 - 統計期間1976～2022年で10年あたり2.7回の増加、信頼水準99%で統計的に有意。
 - 最近10年間（2013～2022年）の平均年間発生回数（約25回）は、統計期間の最初の10年間（1976～1985年）の平均年間発生回数（約14回）と比べて約1.8倍に増加しています。

- 全国の1時間降水量100mm以上の年間発生回数には増加傾向が現れています。
 - 統計期間1976～2022年で10年あたり0.6回の増加、信頼水準95%で統計的に有意。
 - 最近10年間（2013～2022年）の平均年間発生回数（約4.4回）は、統計期間の最初の10年間（1976～1985年）の平均年間発生回数（約2.2回）と比べて約2.0倍に増加しています。

注意事項・補足

- 「おおむね2倍程度」については、以下のような幅を持った表現もできます。ただし、数値は統計手法や期間等で変わりうることに留意ください。
「1980年頃と比較して、約1.8倍～2.1倍（※）に頻度が増加している（※ 1時間降水量80mm以上、3時間降水量150mm以上、日降水量300mm以上などの強度の強い雨。統計期間は1976～2022年。）」
- これらの変化には地球温暖化が影響している可能性があります。
- なお、アメダスの観測期間は約50年程度と比較的短いことから、地球温暖化との関連性をより確実に評価するためには今後のさらなるデータの蓄積が必要です。また、1時間降水量100mm以上など特に強度の強い大雨の回数は現象の発生が稀なことから、各年の値の換算が適切でない場合があります。
- 長期変化傾向の評価等に関しては、[長期変化傾向（トレンド）の解説](#)をご覧ください。
- より強度の強い雨ほど頻度の増加率が大きい理由については、[こちら（第6回 気候変動に関する懇談会資料）](#)をご覧ください。

[このページのトップへ](#)

• [気象庁ホームページについて](#)